

國學院大學學術情報リポジトリ

中国博物館学の萌芽期の単行本に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 彭, 露 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001486

中国博物館学の萌芽期の単行本に関する研究

彭 露

論文要旨

1936-1943年までの間、中国博物館学界で出版された単行本は5種を数えて、費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』(1936)、陳端志が上梓した『博物館学通論』(1936)と『博物館』(1937)、荊三林が出版した『博物館学大綱』(1941)、曾昭燏と李済が著述した『博物館』(1943)である。上記した単行本は、当該期の中国博物館学に関する研究の具体的な成果として、中国の博物館学に関する研究にとって、重要な研究意義がある。

本稿では、上記5冊の単行本の主な内容を分析し、本文と章立てを考察することにより、当該期の中国博物館学界や博物館学研究が博物館において社会教育の役割を重視した点であった。

その上、これらの単行本の参考文献を検討し、当該期の中国博物館学は、日本と西洋の博物館学観念を全面的に吸収して模倣した時代にあった。更に、これらの単行本の付説の内容(中国における博物館・中国博物館学に関する刊行物・海外諸国への博物館紀行文・中国博物館協会・法令)により、当該期の中国博物館学事業の展開の全貌を了解出来得る。

はじめに

中国では、1936年に博物館学に関する単行本が出版され始めた。1936-1943年までの間、中国博物館学界で出版された単行本は5種を数える。これらの通論的な単行本は、本学域についての理論研究の成果として、高度な総括性を有するものと論者は評価している。

それらを刊行年の早い順に記すと、費畊雨と費鴻年が著した『博物館学概論』、陳端志が上梓した『博物館学通論』と『博物館』、荊三林が出版した『博物館学大綱』、曾昭燏と李済が著述した『博物館』である。中国の博物館学に関する研究にとって、重要な研究意義があることは確認するまでもない。上記した単行本は、当該期の中国博物館学に関する研究の具体的な成果であり、いずれもが中国の博物館学事業の展開を牽引、指導した著作

であった。その上、これらの単行本の付説された参考文献などは当該期の中国博物館学事業の展開の全貌を了解出来得る資料であることも事実である。

しかし、これらの単行本に関する研究の現状は、未だ不十分であると云われていると論者は考えている。現在の中国博物館学における研究の重点は、博物館の実践的技術に関する研究であるところから、博物館学史についての研究は、あまり研究対象にされていないのが実情で有ると同時に、中国博物館学の特質の一つといえよう。

本稿では、上記5冊の単行本の主な内容を分析し、本文と付説などを含み考察することにより、1949年以前中国の博物館学界や博物館学研究の実態を明らかになり、博物館学の学術としての体系の構築を行うためのひとつの要素となるものと考えている。

1、萌芽期の中国博物館学に関する単行本

『中国博物館学研究著述目録』^{註1}の統計によると、1949年以前の中国の博物館学の通論的な単行本は5冊に留まることは前述した通りである。具体的には、表1のであり、以下各々の特質を述べることにする。

出版年	著者名	書名	出版元	全頁
1936年	費畊雨・費鴻年	『博物館学概論』	中華書局	216頁
1936年	陳端志	『博物館学通論』	上海市博物館	270頁
1937年	陳端志	『博物館』	商務印書館	62頁
1941年	荊三林	『博物館学大綱』	中国文化服務社陝西分社	102頁
1943年	曾昭燏・李濟	『博物館』	正中書局	84頁

表1 1949年以前の中国の博物館学の通論的な単行本

(1) 1936年刊行の費畊雨・費鴻年共著の『博物館学概論』

本書^{註2}は、13章で構成され、各章の内容は次のとおりである。第1章 緒論、第2章 博物館発達史略、第3章 博物館の種類及効能、第4章 地方博物館、第5章 教育博物館、第6章 学校博物館、第7章 児童博物館、第8章 室外博物館、第9章 動植物園與水族館、第10章 物品的収集與保存、第11章 博物館的陳列、第12章 博物館的社會事業、第13章 博物館的建築である。第1～第3章は、博物館の基礎理論を論じ、第4～第9章は博物館の専門領域による博物館の種類を紹介し、第10～第13章までは博物館の機能と博物館経営に関して論述した。

第1章は、序論で博物館と教育の関係に付いて触れ、博物館と社会教育・学校教育・専

門研究機関の関係を説明する。次いで、国内外の博物館の比較検討を行うことにより差異を検出し、論点としている。なかでも注視されるのは中国の博物館が外国の博物館より未発展である点は、博物館の館数と博物館の機能であると指摘している点である。

最後に、費兄弟は動物園・植物園・水族館なども広義に言えば、博物館の体系の中に組み入るべき施設であることを特に指摘している。

第2章は、博物館の発展史の紹介で、6段階に区分している。具体的には、博物館の起源・ローマ時代の個人的な収蔵・中世に於いての宗教的な博物館・文芸復興期の博物館の特徴・十七世紀の旧式の博物館・十九世紀の様々な種類の博物館（専門博物館・神学博物館・科学博物館・大学専門学校博物館）と区分しそれぞれの特質について論述している。第2章の内容は、博物館の発展沿革・博物館展示の発展沿革・博物館建物の発展沿革である。

本章は、当該著書の特徴である中国博物館の沿革についてはじめて言及しており、中でも注目に値するのは中国人による独創としての博物館として、中央研究院の自然歴史博物館（1930設立、以下設立年）・北平天然博物院（1929年）・広州市立博物館（1929年）・河北省立博物館（1918年）・湖南博物館（1924年）・現在は浙江省立博物館である西湖博物館（1929年）が中国博物館の萌芽であると指摘した点である^{註3}。

第3章は、博物館の種類と役割を記し、それに基づく博物館の分類は、表2の通りである。

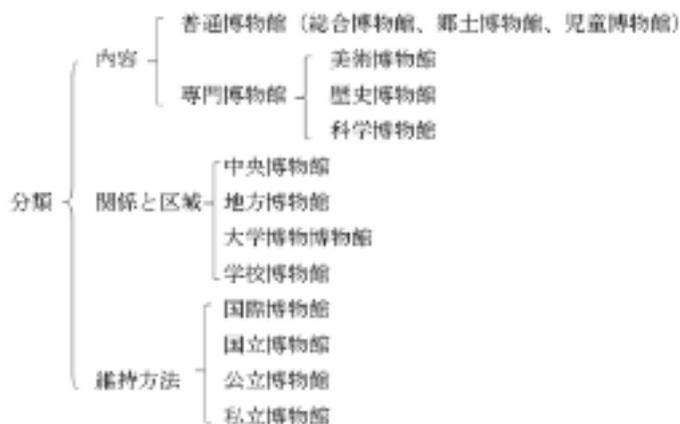


表2 『博物館学概論』と『博物館学通論』の中での博物館の分類

第4章から第9章までは、博物館の専門領域の視点で典型的な博物館を個別に論じており、地方博物館・教育博物館・学校博物館・児童博物館・屋外博物館・動植物園と水族館を含んでいる点も当該著作の特徴であろう。これらの博物館を紹介する際には、多くの外

国の博物館事業を挙げて論述している。注目に値するのは、教育博物館、学校博物館、児童博物館の三種の博物館をそれぞれ列記している点である。費が教育系博物館に注目したことは、博物館の総体を教育と捉えていることを明示しているものと考えられる。

第10章から最終章である第13章までは、博物館の機能と博物館経営に関して論述し、第11章では博物館の展示については、中国の博物館の陳列法が専門家から民衆へ対象が移行している点に着眼して、博物館の陳列の進歩であると考察している。当該期の中国博物館学界が目標とする博物館は、国家が推進する民衆教育思想と整合した結果と看取される。つまり、単なる資料の羅列ではなく、意図のある展示の完成を指摘したのである。

最終章の第13章は、博物館的建築で博物館経営論の視点から博物館の占地・博物館と建築家・博物館建築設計の原則・博物館各室の配置・博物館建築の増築・建築的構造の様式・博物館の採光等々について詳述している。

以上の内容を有する費兄弟の共著による『博物館学概論』は、系統的な体系に重点を置き、基礎理論の紹介の上で、実務的応用論を紹介したものであったところから、中国での博物館学を普及させる大きな契機となった。

更に注意すべきは、本書各章の後に五点の確認問題を記していることである。この五点の問題は、本章の内容の概括であり、読者への確認を目的とするものとなっている。確かに、本書の中に挙げた例は、すべて西洋の博物館事業の実践例であり、中国の博物館事業への言及は僅か1節に限定されているに留まる。

しかし、序章で中国の博物館事業の欠如を強調したが、当該期中国では自主的な博物館事業の実践が芽生えていて、博物館の活動を模索する時期となっていた。しかしなお理論が実践より遅れていたことは否めない。当該期の博物館学者は、博物館学を民衆に普及させる目的であったことは行間からも読み取れる。そして、専門職員である工作人員についての必要性を論じた点も特徴的であった。本書が編纂された目的は、博物館の設置者や運営者が博物館と博物館学の理解の推進を求めることであったと総括できよう。

(2) 1936刊行の陳端志による『博物館学通論』

本書^{註4}は、18章から構成され、各章の内容は次のとおりである。第1章 概論、第2章 博物館的演進、第3章 我国博物館事業之発軔、第4章 博物館の種類及効能、第5章 中央及地方博物館、第6章 戸外博物館、第7章 教育博物館(上)、第8章 教育博物館(下)、第9章 動植物園及水族館、第10章 博物館的蒐集和整理、第11章 博物館的製作和修理、第12章 博物館的陳列、第13章 博物館的説明、第14章 博物館的利用、第15章 博物館宣伝、第16章 館舎建築的改進、第17章 陳列器具的設計、第18章 工作

人形的養成である。第1～第4章は、博物館の基礎理論を論じ、第5～第9章は博物館の専門領域による博物館の種類を紹介し、第10～第18章までは博物館の機能と博物館経営に関して論述した博物館学の専門図書である。

第1章は、「博物館」という言葉の由来と博物館の発展沿革を簡単に紹介し、第2章は博物館の発展史を具体的に紹介している。陳は、博物館の発展史を費兄弟の著である『博物館学概論』での分類と同様に6段階に区分しているが、各段階区分を詳細に論じているのが特徴である。さらに、本書が具体的に言及するのは、博物館史の最古の史料が、アレクサンドロス3世が略奪品をアリストテレスに贈与し、保存した記録である。また、18世紀のヨーロッパでは、常設博物館は勿論のこと臨時博物館なども盛行した点から、博物館は大衆化の時期に入ったことを指摘したのである。

第3章は、中国の博物館の発展史を個別に列挙して述べている。本書は、博物館の設置母体によって異なり、先ず中国国民が設立した博物館の嚆矢は南通博物苑（1905年開設）であり、続いて政府が設立した博物館の濫觴は北平古物陳列所（1914年開設）であると記している。さらに、地方政府が設立した博物館の濫觴は、南京古物保存所（1915年）であり、国民と政府が連携して設立した博物館の始まりは天津博物院（1918年、1928年に“河北第一博物院”に改称した。）であり、中国中央政府が最初に設立した博物館は国立故宫博物院（1925年）であることを、具体例を挙げながら結論づけたものであった。

中でも、北平中央研究院の天文陳列館（1928年開設）が中国において最古の専門博物館であると指摘したことが本書の特徴の一つである。

次いで、新文化運動^{註5}と中国博物館の展開状況を説明する。新文化運動とは、中国伝統的な思想を打破し、民主と科学を提唱することを目指した。故に、中国伝統文化を収集展示する博物館は、新文化運動者が反対すべきであるものであるという観点があった。本書は、新文化運動が中国博物館事業を誤解したことを批判して、中国の博物館事業が1915～1927年まで中断した原因は新文化運動であったと指摘した。

第4章は、博物館の種類と機能を紹介する。その分類は、費兄弟が著した『博物館学概論』と一致する（表2）が、諸外国の博物館を実例として詳細な論述が認められる。さらに、博物館の職能を論述し、博物館と社会教育・学校教育・学術研究の関係を詳しく記している。

第5～第9章までは、博物館を具体的に分類し紹介する。中央及び地方博物館・屋外博物館・教育博物館・動植物園及び水族館である。本書は、教育博物館をさらに教育博物館・児童博物館・学校博物館の3種類に分類している。陳は、本書の中で教育博物館は必ずしも学生と子どもを主対象とするものではなく、利用者のすべては民衆であると指摘してい

る。

第10～第18章までは博物館の実務関連を記している。蔵品の収集と保存・陳列・博物館の利用サービスの発展・博物館の建物・博物館工作人員の養成など多岐の内容を含んだ章となっており、費兄弟が著した『博物館学概論』とほぼ同一視点による展開ではあるが、内容はより詳述されている。しかし、陳列に関する内容は、費兄弟が著した『博物館学概論』と異なる考えを以って展開されている点の特徴である。先ず、陳は、陳列には2種の目的があるとし、第1点は観衆の好奇心を誘発すること。第2点は文化に関する知識を伝達することであると、陳列の目的に関する概念規定を企てている。

次に、提要展示法と共同展示法を紹介し、工芸品の展示方法についても言及している。本書で言う提要展示法とは、当該博物館の少量の特徴的収蔵品のみを展示し、この蔵品に関する他の資料群は収蔵庫に保存する方法である。また、共同展示法とは、一連の蔵品が復元展示される方法である。

最後に、陳列室の配置と説明書の使用について説明している。社会に於ける博物館の利用について、博物館が教育機関であるという考え方に立脚した、論究であることが看取できよう。

博物館の宣伝について、博物館の広報は広告宣伝・ニュース・宣伝・口頭宣伝（ラジオ放送）などの形式に頼っているとした上で、次いで博物館の入場券や開館時間などの内容についても多くの外国博物館の運営方式を事例として援用して述べている。最後に、特別展示会やコンサートなどの活動が博物館を利用する上での特点に関して論述する。

建築論については、費兄弟が著した『博物館学概論』と一致するが、展示と博物館工作人員に関しては基本視点は異なり、陳は両者を二章に分け深く論究している。中でも、博物館工作人員に関する部分の論述は特徴があり、本論では博物館工作人員を養成する必要、準備、研修、方法及び問題などの多方面についても論及している。つまり、博物館専門職員の短期専門技能訓練による人材養成を具体的に明示したのであり、博物館工作人員の専門性と必要性を肯定し、博物館工作人員の課程を開設することの必要性を詳述するなかで、今日の如く博物館学が大学で開講されることを始め、独立の学科として認められるであろうことを予想している点も本書の特徴である。

付録には、中国の当時存在する博物館を統計した表や、本書の参考文献を列挙して読者に当該期中国の博物館事業の発展状況を概ね理解できる啓蒙書的著作となっている。

最後に本書の特徴は、細目が細部にわたって説明され、論述と例示の紙面が既存の書と比較してはるかに多く、外国の博物館の事例を大量に引用して詳しく述べている点が大きな特徴である。多くの外国博物館の外観図を添付して、読書が興味を持つよう構成され、

同時に読者にとって海外の博物館の外観の理解が容易となるものとなっている。巻末に記載された参考書は、当該期の中国博物館学の主な学習方針を理解させることができる。本書は、中国での博物館学の早期の通論的な単行本として、当該期中国の学者が博物館学に関する研究の現状を社会に啓蒙する書であったと評価できよう。

(3) 1937年刊行の陳端志による『博物館』

本書は^{註6}、5章で構成され、各章の内容は次のとおりである。第1章 緒論、第2章 博物館之目標與職能、第3章 設立博物館的先決問題、第4章 博物館的設立與管理、第5章 博物館の推广與活動である。第1章と第2章は、博物館学の理論研究である。第3章から第5章は実際の応用である。陳による『博物館』は、前年の1936年に出版された『博物館学通論』と比較して、内容が前書よりも明快である点の特徴である。つまり、『博物館』は『博物館学通論』の普及版として纏められたところから、本書は『通論』より、内容が読みやすく、文体も平易で国民への普及を目的とした書となった。このような意味では、本書は博物館学の知識を普及する読み物と見なすことが適切だと考えられる。

本書は、博物館の理論知識を簡単に紹介し、博物館の定義・沿革・分類などを明確に纏めている。

第1章は、博物館という言葉の由来と定義を紹介して、博物館の進化と種類を述べている。特に中国の博物館事業の沿革を詳述する点も特徴である。博物館の沿革に関する内容は、『博物館学通論』と一致するが、より簡潔でありながらも仔細である。博物館の分類は、『博物館学通論』と『博物館学概論』は同一であるが、『博物館』は表2と表3の対比からも明確であるように両者の分類基準は抜本的に異なる。



表3 陳端志『博物館』の中で博物館の分類

上記の図によれば、博物館の分類について、『博物館通論』と『博物館』の相違点は、学校博物館の分類である。『博物館通論』では、学校博物館は、特別な博物館として、単独の種類に位置づけている。

第2章は、博物館の目標と機能についての論述を主とし、博物館運営の目標について触れた点は、従来の書籍には認められなかったことである。博物館の目標は、動態と静態の二つの形式であるとしている。静態の形式において博物館は、その国の国民性または国土の特徴となる長所や美点にかんする文献と専門学問、各地方の郷土の特徴を保存する場所である。動態の形式において博物館は、民衆が学識を自主的に討究することにより、社会文化と民族産業、即ち中国民族産業とは、中国国民自分自身で創建する産業であり、このような民族産業進展を図ることである。この点は、博物館が古物の倉庫から文化産業の原動力に転じるべきであるとする理論である。

さらに、博物館の機能を紹介する中で、学校教育と社会教育の補助、文化学者の研究の場としての博物館の目的とは別に、博物館と商工界の関係に言及している点も特徴的である。博物館は、教育のみに留まらず技能の発展促進と、商工業の先端技術を革新する役割がある点を強調したのであった。

本書は、理論的な知識に関する論述は比較的簡略に述べており、その重点は主に博物館の実際応用に置かれている。

第3章と第4章は、博物館内部の日常の業務であり、第5章では博物館の対外サービス・普及などに関する問題について述べている。

第3章は、博物館の設置母体・博物館財政・博物館の占地・博物館の建築・博物館工作人員の養成などの内容に言及する。これらは、博物館を建設する以前に解決しなければならない基本的要件である。

第4章と第5章は、蔵品の募集・収蔵・展示などの活動と博物館の社会活動について説明する。

全体評価で言えば、本書は前述のとおり『博物館学通論』の普及版であるところから『博物館学通論』の内容とほぼ一致し、大きな違いはないが、応用博物館学に重点を置いた上で、一方理論博物館学については凝縮された項目でまとめられている。文章の条理と章節の構成方法によって、本書は『博物館学通論』と比較して、更に明確に記されているところからも読む者をして理解せしめ、高い普及性を持っていると評価される。

(4) 1941年刊行の荊三林による『博物館学大綱』

本書は^{註7}、全5編の講座本の形態を呈し、各章の内容は次のとおりである。第一編

緒論、第二編 博物館事業之發達史略、第三編 現代博物館之形式與功用、第四編 博物館之陳列方法、第五編 科学博物館之各部門及其組織である。第一編～第三編は、基礎理論であり、第四編と第五編は實際応用の部分であり、全体には博物館展示に重点を置き言及したものとなっている。

本書は、博物館の基礎理論から着手して、主に博物館の沿革、形式、機能などの博物館の内容について論述している点を特色とする。

第一編は、序章であり、第一章は、主に博物館の定義と分類を説明している。次いで、博物館設立の意義について論究し、資料の保存と活用については古物を保存するだけではなく活用による教育的な意味を担っていると結論付けている。博物館の機能については、博物館教育の道具として文明を製造する場所であるとする考えを提言している。第二章は、博物館の分類に言及し、表4のような分類表を明示している。

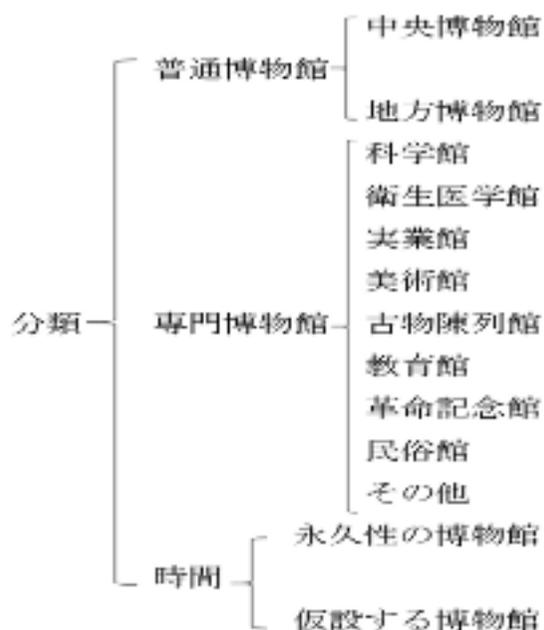


表4 『博物館学大綱』の中で博物館の分類

第二編は、博物館の発展史であり、荊は博物館の発展史を4段階に分けている。即ち、18世紀の博物館・19世紀の博物館・現代の博物館・博物館の未来として区分している。

この区分のうち、前の2段階の論述する内容が、陳端志が著した『博物館学概論』と同一の内容で展開するが、次の点を重点的に指摘している。まず、博物館は、公衆のために設営される観念は18世紀に確立し、19世紀の博物館は現代化の時期に相当するため、新式

的な博物館は個々の歴史資料を研究せず、資料と資料の比較により資料間に発生する関係を研究するべきであるとする博物館での研究理念を提唱した。つまり、19世紀の博物館学の理念は、単独の歴史資料を独立に研究するのではなく、資料間の関連を比較研究する研究方法であった。

世界で最初の科学博物館は、1869年にアメリカのニューヨークに設立されとし、十九世紀に博物館の発展傾向が徐々に庶民的になっていく傾向を確認した上で、現代世界の独、露、英、米の発展概要を挙げ解説している。最後に、博物館の発展には、さらに大人の教育を重視する必要があると指摘する。

第三編は、博物館の形式と機能について論及し、博物館の機能は保存・研究・鑑賞であると独自の理念を打ち出している。これは、同じ時期に他の単行本が言及した博物館の機能とは大きく異なり、博物館の展示機能・教育機能に代わり博物館の鑑賞を機能の必要性を提唱した。即ち、展示機能は博物館が行う機能であり、鑑賞機能は観覧者自身が有する機能であるとする考え方であった点が新たな観念であると指摘できよう。

また、博物館資料には、研究品と展示品の違いがあるべきであり、研究のための資料が優先される資料であると考えている点も特徴であると言えよう。

さらに、博物館の建築と展示については、両者の本質は観衆の好みのためであって、その展示が普通観衆の感情の需要に合致するべきで、研究者の需要に合致することは必要ではないと断じている。最後に、博物館の発展と新時代の博物館の変化傾向を想定し、荊も「郊外博物館」の台頭と普及を想定したうえで、特別に説明している。

第四編は、博物館展示の重要性について著述し、博物館の展示方法と博物館展示に存在する種々の問題について詳細に論述したものとなっている。展示の方法を詳しくまとめて、年代的に先行する三冊の著作より更に専門性を備えた論調であると評価できよう。本書で挙げられている多くの事例は、外国博物館だが、中国国内でも参考可能な博物館を挙げていることも重要である。

第五編は、主に科学博物館を対象としてその部門と組織形式に関する検討である。科学博物館は、科学の知識を広める重要な任務を担っていることを指摘し、科学博物館の藏品分類・仕事・部門などの広く博物館経営についての内容を検討している。

本書は、付説で英国とドイツの博物館の見学記と科学博物館の重要性を記した論文に触れ、欧米博物館の展示方法と運営方式を詳しく紹介して、中国の博物館の事業発展に参考になることを指摘している。荊が、本書のサイズが小さいところから緒言の中で「小冊子」と呼んでいる『博物館学大綱』は、博物館の重要性を強調することを目指しており、博物館を利用して知識、特に科学の知識を民衆に広めることを目的とする点を強調した独創的

書籍であると評価できる。

(5) 1943年刊行の曾昭燏・李濟による『博物館』

本書^{註8}は、全体で10章を立章し、各章の内容は次のとおりである。第一章 緒論、第二章 組織、第三章 管理、第四章 建築、第五章 設備、第六章 収蔵、第七章 保存、第八章 研究工作、第九章 教育工作、第十章 戦時工作である。第一章の理論と第二章から第十章までの技術的実践に分けられる。第一章の理論についての部分の論述が非常に簡潔であり、博物館の具体的な実践についての内容は、本書が主に博物館の業務に重点を置いて論述して、特に戦争期における博物館事業の展開を重点的に言及している。

第一章の序論で博物館の沿革、分類、目標に言及した。博物館の沿革について述べて、創始と発展の段階・現在の概況を簡単に分けている。

また、博物館の祖型は、古代のバビロンにあったと指摘している。そして、博物館の現在の概況について論述する中で、米・英・仏・伊・露での博物館の事業の現状を列挙している。

次に、中国の博物館事業の発展について論じ、その中で『宣和博古図録』^{註9}、『西清古鑑』^{註10}などの書籍は、博物館の目録の祖型であるとする観点を披露している。さらに、中国の早期の収蔵品が博物館にならなかった原因を2点あげ、第1点は昔の中国は宝物を収集する宝物庫があったが、宝物庫は博物館ではなかった。昔の中国において、博物館がなかった原因は、昔の中国人が古物を重視するが、科学物品を重視しなかった為であると結論している。第2は、当該期の収蔵品は少数の限られた人々の関心を満たすだけであり、民衆への還元は行われなかった点であることを記している。

さらに、本書では、1913年に創設した交通大学の北平鉄道管理学院博物館を、中国の国家博物館の濫觴であるとする見解を論述している。

中国の博物館事業の現状については、中国は日中戦争の時期にあたるため、被占領区の博物館が戦火によって毀損されるが、一方戦闘域でなかった地域の博物館は博物館事業を積極的に展開している状態であったことも指摘している。

最後に、中国博物館協会が1935年から刊行された『中国博物館協会報』は、盧溝橋事件により廃刊されたことが記されている。

曾と李が著した『博物館』の中での博物館の分類についての具体は、表5の如くである。

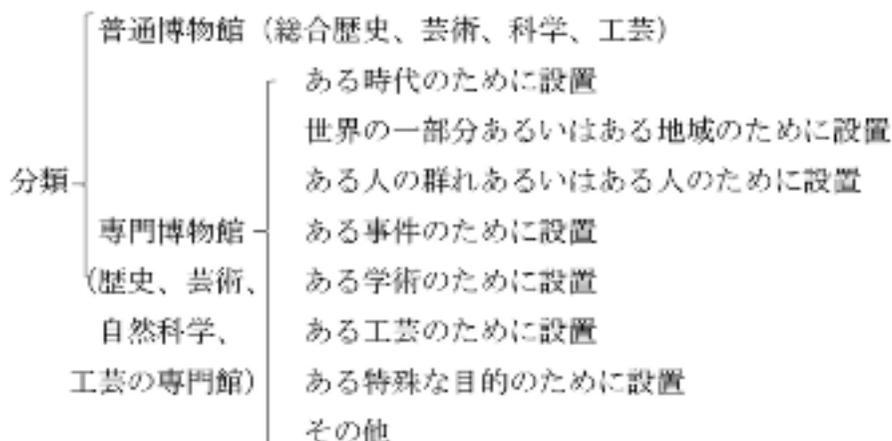


表5 曾昭燏『博物館』の中で博物館の分類

本書は、博物館の目的論と機能論について詳述したもので、博物館設置の目的は四点あると指摘する。まず、第一点は物品の保存であり、第二点は研究の補助である。第三点は、実物の教育であり、第四点は精神の教育であるとしている。

第二章から第十章まで、主に博物館の実際応用と日常の業務内容に触れる。また、当該期の中国は、戦争が頻繁に起こる情勢であったところから、特に戦時博物館の事業を詳しく説明するなどの博物館の実務を中心に展開する。この部分が本書の核心とも言えよう。

曾は、博物館の応用分類を論究し、さらには博物館組織とその管理を言及する。次に、博物館自体の建設問題について検討し、建築・設備・蔵品の収集・保存などの内容を詳述している。最後に、博物館の様々な日常の業務について論述する中で、研究・教育をも網羅し、特に戦時の博物館の事業を重視する。

博物館の組織については、博物館の設立・名称・経費・行政組織などから各種類の博物館に分類して説明する。博物館創立の具体的方法が、読む者をして明確に認識できる書籍であると評価できよう。

博物館の内部管理問題については、開放時間と入館料に関する問題と博物館工作人員の養成問題について説明する。本書は、開放時間と入館料などについては、海外の実例を挙げて検討する必要性があることを指摘した。また、博物館工作人員の養成にとって、本書は大学で博物館工作人員を養成する必要性があることを明確に言及した点は、博物館工作人員養成に新たな視点を投じた1書であると評価できよう。

本書のさらなる特徴は、戦時における博物館事業の検討を特徴とし、西洋国家の先例を挙げながら当該期の中国博物館の事業の必要性を指摘している。

本書の付録は、2種類があり、1は博物館の法令であり、2は参考文献である。

本書は、博物館の日常的な業務における様々な問題について、簡潔かつ網羅的に紹介しようとしている。本書の内容は多岐に亙るが、紙幅の関係の為か、検討内容は、概括的にまとめることを重要とする。本書を博物館学の指導書籍とするのは、有益であると考えられる。

小結

以上は、本論文が取り上げる五冊の単行本を簡単に紹介した。この五冊の単行本は、1949年以前の中国の博物館学界が中国の博物館学を探求する目的で学術書籍として公刊された著であるが、今日の研究視座からすると不備な点も著しく存在するが、それらは中国の博物館学の構築の歴史であり、また中国の博物館の歴史でもある。これらの歴史の把握は、なにも博物館学史に有益である点に留まらず、中国の近代化を確認できる歴史でもあると考える。

(6) 各単行本における論点の共通性と特殊性

博物館学の五冊の単行本が出版された1936年から1943年までの7年間は、中国の博物館学の事業発展の第二段階^{註11}に相当する。この段階の主な特徴は、博物館において社会教育の役割を重視した点であり、また日本と西洋の博物館学観念を全面的に吸収、模倣した時代であった。

一方で、『中国博物館学理論体系形成與発展研究』^{註12}によれば、当該期は中国博物館学の構築が始まった段階であり、大学教育に博物館課程が設置された。即ち、博物館学理論を確立し、知識体系と研究標準形態を明示することにより、博物館学は独立の学科に昇華された。これらの単行本の主な目的は、博物館の理念を啓蒙し、博物館学を系統的に研究することであり、体系化を図ることであった。

1905年から中国の博物館学は実践を始め、その後30年間の応用的な実践の蓄積により、中国の博物館学を学科とすべく系統性を定めた上で、博物館事業の発展を指導する必要があることを明らかにした。当該期に上梓された通論的な単行本は、博物館理論から博物館の実務に関しても指導を試みた博物館学にとっては基礎的書籍であった。しかし、中国の博物館事業の応用実践は、出発点からの期間は短く、まだまだ理論形成が不十分で、当該期の大量の理論は西洋からの移入理論であり、実践方法も西洋を中心に参考としたもので中国独自の博物館学に到達したものではなかった。

本論では、先述の五冊の単行本が重視する内容の変化によって、二種に区分する。第一種は、陳端志と費兄弟の著作であり、即ち理論と応用の両方を重視することを提唱し、博物館学を徹底的に理解することを旨とした。第二種は、『博物館学大綱』と曾と李が著し

た『博物館』であり、即ち実際の応用を重視するが、理論の紹介はある程度に留めた思潮を基軸とする。

第一種類の著作として、費兄弟が著した『博物館学概論』、陳端志が著した『博物館学通論』と『博物館』を挙げる。

『博物館学概論』と『博物館学通論』の二冊の単行本について、両者の類似性は、非常に高く、僅かに枠組みと細部に若干の違いがあるのみである。

まず博物館学の理論について、『博物館学概論』は、大半は棚橋源太郎による『眼に訴へる教育機関』の焼き直しに過ぎないと評価せざるを得ない部分を有している。

『博物館学通論』は、確かに基礎理念の上で欧米の新しい観点を加味しているが、やはり模倣が中心であることは否定できない。梁吉生^{註13}は、当該書に対して「移植的な思考」と呼んで、「西洋の博物館学の思惟」を超えないと評価しているとおりである。確かに、このような模倣性と模倣に専従する停滞性は、中国の博物館学が発展するに当たり必要な段階であるとも思料される。しかし、中国の博物館学の進路を探る試みも、以後博物館が中国国内での増加に伴い、博物館理論も基礎を築いていった。

上記の博物館の理論形成の具体的内容は、博物館の発展史・博物館の分類・博物館緒機能などの分野に互るが、その中でも博物館の教育機能を主としたところから、博物館は民衆に属するとする観念が広く普及するに至った。つまり、博物館は、国民の教育を提供する場所であると考えた“博物館総体教育機関論”の芽生えであった。

次に、応用博物館学については、『博物館学概論』の中で論述され、物品の収集保存・展示・博物館の社会事業・博物館建築などの分野として構成され、その詳細について述べている。

一方で、『博物館学通論』では、さらに細かい分類がなされている。物品の収集保存は、収集整理と制作整理に分類し、展示・説明・展示器具に細分し、博物館の社会事業は利用と宣伝に細分されている。その上で、博物館工作人員養成の内容を加えた内容となっている。

次に、陳端志が1937年に出版した『博物館』について検証する。特徴は、理論を簡略化し、応用に重点を置いたことであり、その内容については洗練されていると評価できよう。前述したように科学普及読物と見なすべきで書ある。

『博物館学概論』は、全216頁で、『博物館学通論』は270頁を数える。これに対し陳による『博物館』は62頁であった。単行本の紙幅から、『博物館学概論』と『博物館学通論』は、博物館学の学術性とその機能の全面的な紹介を目的としたのに対し、『博物館』は簡潔な普及版であると理解される。

第二種類の著作は、荊三林が著した『博物館学大綱』と曾昭燏が著した『博物館』である。この種類の著作は、第一種類の著作と比較して、理論は全体に脆弱であり、紙面も『博物館学大綱』は全102頁であり、曾の『博物館』は全84頁である。どちらも比較的洗練された内容である。博物館の日常業務と実務応用に関しては入念に記され、博物館の日常業務の専門化と、規範化を指導することを趣旨とする。

『博物館学大綱』は、博物館学を学科として大学で開設するために編集された教科書であり、博物館事業の発展のために博物館工作人員を養成する指導書でもあった。その中で、展示と科学博物館の設置が重要な内容として記述されている。

曾昭燏が著した『博物館』は、力点を応用博物館学に置き、博物館の業務の中で言及した組織・管理・構築・設備・藏品・保存などに触れて、博物館業務の重点を重点的に言及した点が特徴である。博物館での通常教育機能と研究機能、更に当該期の社会環境に応ずる戦時中の博物館事業に触れる。

上記の内容についての区分のほかに、書籍を編纂する根拠によって、五冊の単行本を分類すると下記のとおりである。

第一類は、間接的な経験に依拠した文献である。つまり、ただ単に外国文献を踏襲し編纂した陳端志・費兄弟・荊三林の著述がこれに相当する。さらに言えば、陳・費・荊の著述は、他人の著述を参考にしたもので自分の観点が極めて少ない点が特徴である。

第二類は、例えば曾昭燏が著した『博物館』の如く、自身の留学経験に基づく博物館理念と海外の文献を結合した博物館理論書である。『中国博物館学理論体系形成與発展研究』^{註14}によれば、西洋に遊学した曾昭燏が著した『博物館』は、他の著作物と比較して博物館に関する認識を世界的視座と専門性を以って捉え、さらに中国の実情を合理的に結合させて博物館理念を構築したものと評価されている。

小結

確かに、「博物館」という言葉は、中国と日本のどちらが先に翻訳したのかは疑問であるが^{註15}、初期の中国の博物館学は、日本の博物館学の研究に影響を受けていることは否めない事実である。日本の博物館学も、西洋からの思想移入に拠り開始された点は、中国と同一であると看取される。中国の博物館学は、日本を通じて間接的学習をし、欧米で直接的な学習に至り、結果として国際的な博物館学として展開するにいたっていると考えられる。

2、付説の概要

(1) 参考文献^{註16}

本論文中で扱った五冊の単行本の中で、参考文献を示しているのは、四冊のみである。即ち、『博物館学概論』^{註17} 『博物館学通論』^{註18} 『博物館学大綱』^{註19} 『博物館』^{註20}である。『博物館学通論』と『博物館』は、詳細な参考文献を掲げて論述しているのに対し、『博物館学概論』は棚橋源太郎による『眼に訴へる教育機関』^{註21}一冊のみを参考とする。

『博物館学通論』の参考文献は、39冊であり、付説の中で詳細に記載されている。まずは、中国語の著作と訳本であり、具体的には表6の通りである。次に海外の参考文献は中国語に翻訳されることなく、そのまま原文で抄録されている。

また、参考文献は、欧米文献と日本文献に二分され、その掲載数が多いことを特徴とする。日本の文献は、表7で掲載し、欧米の文献は表8で記した通りである。

『博物館学大綱』の参考文献は、1936年にL.C. Everardが著して、李永増が翻訳した「博物館與陳列館」^{註22}に、1936年にアメリカ人のClarence S. Steinが著して、趙儒珍が翻訳した「現代博物館之形式與功用」^{註23}である。さらに『博物館学大綱』の展示に関する部分は、“李瑞年の大作”を採用した点に言及するものの、具体的な書名は記していないが、当該参考文献は資料内容から1935年に李瑞年が著した「欧美博物館及美術館陳列方法之演進」^{註24}であると論者は考えている。『中国博物館学研究著述目録』によると、当該期に李瑞年が著した博物館展示に関する論文は、「欧美博物館及美術館陳列方法之演進」であり、そこに記載された内容から、論者は上記の主張をするものである。

荊三林が著した「科学館之工作及組織問題」^{註25}も参考文献とする。荊は、『博物館学大綱』の中で、上記の参考文献が全て『中国博物館協会会報』一卷と二巻の中に載せられていると述べている。

曾の『博物館』の参考文献は、22冊を数え全て明記した上で2種に分けている。第一類は、定期刊行物であり、表9に示した。第二類は、海外の単行本であり、表10の通りである。

表6 『博物館学通論』の参考文献—中国語の著作と訳本

書名	作者あるいは訳者	出版年	備考欄
『考古発掘方法論』 ^{註26}	胡肇椿 訳	1934	英 G.L.Woolley 著
『中国博物館一覧』	中国博物館協会	1936	
『博物館協会会報』	中国博物館協会	1935	
『南通博物苑品目』	張謇	1914	
『亞洲文会博物院史』	亞洲文会		
『西湖博物館館刊』	西湖博物館	1933	
『民衆教育』	陳礼江	1934	
『社会教育実施法』 ^{註27}	孫逸園	1926	

表7 『博物館学通論』の参考文献—日本語の著作

書名	作者	出版年
『眼ニ訴ヘル教育機関』	棚橋源太郎	1930
『欧米ニ於キル博物館ノ施設』 ^{註28}	後藤守一	1931
『欧米美術館施設調査報告』	帝室博物館	1921
『帝室博物館年報』	帝室博物館	1935
『全国博物館案内』	日本博物館協会	
『博物館研究』	日本博物館協会	月刊・1928年創刊
『博物館教育』	樺太廳博物館	
『樺太廳博物館案内』	樺太廳博物館	1933
『弗蘭西博物館制度ノ調査』	文部省普通學務局	
『福岡市通俗博物館要覧』	福岡市通俗博物館	

表8 『博物館学通論』の参考文献—英語の著作

書名	国別	作者	出版年
The Small-Community Museum	英	W.N.Berkeley	1934
A Naturatist in University Museum ^{註29}	米	Buthven	1931
Collected Paper-san Museum Preparation and Installation ^{註30}	米	The American Association of Museums	1927
A Bibliography of Museums and Museum Work		Smith	1900-61
Plan for a New Museum	米	Dana	1920
The Gloom of The Museum	米	Dana	1917
Historic House Museums	米	Coleman	1933
Building The Museum Group	米	Butler	1934
Museums and Art Galleries As Educational Handbook of The Collections		Chubb	
Museums: Their History and Their Use	英	Murray,David	1904

The New Museums	米	Dana,John cothon	1917
Taxideomy and Museum Exhibition	米	Bowley	1925
Report of a Journey Around The World To Study Matters Relating To Museums	米	Brigham	1913
Exploring The Earth and Its Life in a Natural History Museum		Mc Gecay	
Museum and The community	米	Rea	1933
Consolidation of The Law Relating to Public Libraries and Museums	英	Hewitt	1931
Libraries museums and art galleries year book 1935 ^{註31}	米		1935
A report of the public museums of the British Isles ^{註32}	英	Miers	1928
Museum Ideals of Purpose ^{註33}	米	Cilman ^{註34}	1918
The Industrial Museum	米	Richards	1926

表9 曾氏『博物館』の参考文献—定期刊行物

定期刊行物	出版社	出版年	備考欄
『中国博物館協会会報』	中国博物館協会	1935年9月から 1937年5月まで	第一巻・第二巻 毎巻五期
The Museums Journal ^{註35}	英国博物館協会		月に一冊
Museum News	アメリカ博物館協会		二週に一冊
Museum Work	アメリカ博物館協会	1918年から 1928年まで	八冊合計
Museumkunde	ドイツ博物館協会		年に四冊
bulletin des Mus'ees de france	フランス国立博物館協会		年に十冊
Mouseion	国際博物館協会 オフセス		非定期刊行物

表10 曾氏『博物館』の参考文献—海外の単行本

書名	作者	出版年と地点
The Civic Value of Museums	Adam,T.R.	1938年ロンドン
Museums and Schools	Board of Education	1931年ロンドン
Historic House Museums	Coleman,L.V.	1933年アメリカ博物館協会

Manual for Small Museums	Coleman,L.V.	1927年ニューヨークとロンドン
The Museum	Jackson,M.T	1917年ニューヨークとロンドン
Libraries and Museums	Kenyon,F	1930年ロンドン
Antiques: Their Restoration and Preservation	Lucas,A.	1924年ロンドン初版 1932年再版
The Museums and Art Galleries of the British Isles	Markham,S.F.	1938年英国
Drawings and Measurements of furniture used by the Museum	Metropolitan Museum of Art	1923年ニューヨーク
A Manual for History Museums	Parker,A.C	1935年ニューヨーク
Teh Conservation of Prin's: Drawing,and Manuscripts ^{註36}	Plenderlith,H,J	1937年ロンドン
The Preservation of Antiquities	Plenderlith,H,J	1934年ロンドン
Die konservie'ung von Altertumsfunden	Ratbgen,F.	第一巻1898年ベルリン初版、 1915年再版、1926年三版 第二巻1898年ベルリン初版、 1924年再版
Adult Education in British Museums	Scherer,M.M.	1934年アメリカ
The Natural Lighting of Picture Galleries	Walsh,J.W.T.	1927年ロンドン

上記は、この四冊の単行本のすべての参考文献である。本稿では、全部の参考文献を簡単にまとめて表11のように整理した。

表11 単行本の参考文献概況^{註37}

数量 統計 単行本	類別	国別				時間			合計
		日本	欧米	中国	不詳	1930 年前	1930 年後	不詳	
『博物館学概論』		1	なし	なし	なし	なし	1	なし	1
『博物館学通論』		10	18	8	3	15	16	8	39
『博物館学大綱』		なし	1	2	1	なし	3	1	4
曾氏『博物館』		なし	21	1	なし	7	10	5	22
合計		11	40	11	4	22	30	14	66
割合		17%	60%	17%	6%	33%	46%	21%	100%

本稿で取り上げた著作物に掲載された参考文献を国別に観てみると、表7のとおりで、欧米系の参考文献が一番多いことが理解できる。次いで、日本の文献も多いが、当該期中

国の博物館研究の参考として、裨益するところが大きかったのは西洋の博物館文献のようである。中国で博物館学を研究した時間は、当時においてはまだまだ短かったため選択できる参考資料は比較的限られており、「中国博物館協会留下的學術遺産」^{註38}によれば、当該期の中国博物館学にとって重要であったのは、欧米の博物館学の基礎理論を参考に中国博物館の具体的な実践を総括して、徐々に中国博物館学の構築を目的に展開されていこうとしたことは外国文献の利用からも理解できるのである。

(2) 付説

付説の内容は、①中国における博物館・②中国博物館学に関する刊行物・③博物館紀行文・④中国博物館協会・⑤法令である。以下概略を記すこととする。

①中国における博物館

『博物館学通論』^{註39}に記載がある中国の博物館は、普通博物館・専門博物館・動植物園と水族館の三種類に分けられる。それらの博物館の所在地・設立年月日・専門領域・経費源などをまとめて統計としている。

上記の『博物館学通論』の統計によると、1936年までの中国における普通博物館は、(歴史・美術と自然・科学を含む) 45館を数え、専門博物館は23館である。動植物園及び水族館は9館である。この統計には、中国において外国人が作った博物館と私立博物館も含まれている。

特に、自然科学博物館について、『博物館学大綱』^{註40}の付録の中で、「中国之自然環境與科学館应有之特殊性能」の一文によって、自然科学博物館は、中国にとって重要な役割を担う博物館である点を指摘した。理由は、自然科学博物館を媒体として自然科学を広く社会に啓蒙し、中国の自然科学事業の発展に寄与することが国家的施策の目的の一つであったからである。

②中国博物館学に関する刊行物

陳の『博物館』^{註41}の中では、中国の博物館学に関する参考書に言及し、1936年^{註42}に上梓された著書は八冊であると記している。内容は、目録名簿・藏品陳列・保管修復・法案法規などに触れられている。さらに、既刊の博物館学に関する通論的な単行本については、表12の通りである。

表12 陳氏『博物館』の付録一の中で記載された博物館刊行物

書名	作者	備考	出版年
中国博物館一覽	中国博物館協会 編		1936
博物館参考書		印刷中	1936
博物館学通論（上海市博物館叢書）	陳端志 著		1936
古物之修復與保存（上海市博物館叢書）	胡肇椿 曹春廷 著		1936
地方博物館実施法（上海市博物館叢書）	陳端志 著	印刷中	1936
博物館学概論	費鴻年 編		1936
博物館陳列器物図説	陳端志 編	纂訳中	1936
博物館協会会報	中国博物館協会 編		1936

（“印刷中”は、原稿を出版社に送って、プリントしていることで、“纂訳中”は、原稿を編纂していることを示す。）

③博物館紀行文

『博物館学大綱』には、2編の見学紀行文が本文の後に付随する。1編は、傅振倫がイギリスの博物館を見学して記した紀行文であり、他方は劉衍淮がドイツの自然科学と工業博物館を見学して書いた紀行文である。この2編の紀行文は、旅行した博物館についての建物の配置から蔵品の分類まで、すべてにわたり詳細に記録している。これらは、中国の博物館が、西洋に学ぶための情報を提供している。

④中国博物館協会

陳が著した『博物館』の中で、中国博物館協会が1936年（民国25）に開催した第一回年会において、「博物館」の三文字に代わりに、下記のような文字をロゴとして使うようになったと述べている。ウ冠の下には、“博物館”の“博”がある。建物の中で、多くの蔵品がある意味と考えられる。

⑤法令

曾が著した『博物館』は、民国政府が発表した『古物保存法』を付録にしている。これは、1930年6月7日に民国政府が発表し、十四条の条文より成り立つ。これは、古物の定義・帰属・保存の役割・流通・考古学の発掘などの関連内容に関し定めた政令である。

前述の参考文献と付録の統計状況によって、当該期の中国博物館学は、自国での実践経験が浅かったために、博物館学が先進する欧米の例を参考にしていたことを窺い知る。確かに、当該期の中国博物館学界は、博物館学の構築に関心を持ち始めた。もちろん、これも当該期の博物館が国家の滅亡を救い民族の存続を図る歴史的な使命が付与されたことに関わりがある。

法令の公布は、国家が博物館事業について規制と保護を行っていることを示しているも

のであり、博物館事業も国家の支持を得て行われていることが理解できるのである。

おわりに

上記の中国の博物館学の論著からみる博物館学事業の展開状況から、1905～1935年の中国博物館学は萌芽期から発展する段階にあったと言っても過言ではない。当該期の中国の博物館学は、西洋と日本の博物館学の知識を吸収したうえで換骨奪胎ともいえる中国独自の博物館学の発展を試みた時代であった。

当該期の博物館に必要なことは、博物館学の応用により博物館業務の展開を早急に指導しなければならないことであった。民衆にとっては、博物館が民間に普及することは、基礎的な文化に触れることであった。博物館研究員にとっては、博物館は博物館についての学術的研究を専門に行うために良好な場となる。

今後の課題として、萌芽期の中国の博物館学の具体的な展開について、当該期の中国国内の状況と外国の状況を比較した上で、様々な専門書・訳書・論文などの学術的資料を結びつけて、中国の博物館学の構築状況を全面的に理解しようと考えている。

註

1. 段勇2010『中国博物館学研究著述目録』新華出版社
2. 費畊雨・費鴻年1936『博物館学概論』中華書局
3. この意見は、同時期の陳端志が著した『博物館学通論』の中で、南通博物苑が初めて中国人によるオリジナル博物館という意見と相違している。しかし、今中国の博物館学界は、南通博物苑が中国の博物館の肝要との意見を持っている。
4. 陳端志1936『博物館学通論』上海市博物館
5. 新文化運動とは、1910年代後半の中国で勢いよく勃興した文化運動である。新文化運動は、表面には中国伝統的な文語文から白話文への転換した文学革命であり、実際には中国封建社会伝統的な礼儀道徳を打破し、民主と科学を中心とする新文化を提唱した思想革命である。中心人物は、陳独秀・魯迅・胡適などの西洋の教育思想を受け入れた知識人である。
6. 陳端志1937『博物館』商務印書館
7. 荊三林1941『博物館学大綱』中国文化服務社陝西分社
8. 曾昭燏・李濟1943『博物館』正中書局
9. 『宣和博古図録』とは、中国の宋で金石学に関する著書である。宋の大観初年（1107）に徽宗の勅命

により王黼などが編集した古器物図録である。全30巻である。徽宗の宣和内府に収蔵される殷から唐までの各時代を中心とした青銅器類（839件）を集録し、考証している。青銅器は、二十類に分類され、臨画している。銘文も拓本がある。

10. 『西清古鑑』とは、中国の清で金石学に関する著書である。清の乾隆十四年（1749）に梁詩正らが奉勅撰。全40巻である。清宮廷所蔵の殷から唐までの古銅器・銭貨（1529件）などを図示し、考証を加えた。
11. 中国博物館学の第一段階は、1905年に南通博物苑が設立から、1935年の中国博物館学会が成立されるまでの間である。この観点は、中国博物館学界の主流である。しかし、最新の資料（尹侖2017「仏国人記録の中国第一座博物館—雲南府博物館—」『雲南档案』）によって、中国において初めて開設された博物館は、1901年に設立された雲南府博物館である可能性が指摘されているところから、論者は第一段階を1901年から1935年までと考えている。
12. 李慧竹2007『中国博物館学理論体系形成與發展研究』山東大学・博士論文
13. 梁吉生2006「博物館学本土化發展及其今後路向」『中国文物科学研究』
14. 註12と同じ
15. 中国博物館学界は、長きに亙り「博物館」という言葉は日本人の使用に始まるものと把握されてきたが、1839年に林則徐が編訳した『四洲志』の中で、初めて「博物館」という用語の使用を指摘した。1842年に魏源は、『四洲志』を底本として『海国図誌』を上梓した。この『海国図誌』は、1854年には日本でも刊行されて、広く日本で知られるところとなった。このような状況の中で「博物館」なる用語も、『海国図誌』を通じて正式に日本に伝わったと陳建明は記している。（陳建明2005「漢語『博物館』一詞的產生與流傳」『回顧與展望—中国博物館發展百年—2005年中国博物館学会學術研討會文集』）
16. 本論文で列挙した参考文献は、出版時間と国別の明記は論者が収集して整理したものであり、明記しないのは様々な原因によって収集しないものである。
17. 註2と同じ
18. 註4と同じ
19. 註7と同じ
20. 註8と同じ
21. 棚橋源太郎1930『眼に訴へる教育機関』寶文館
22. L.C. Everard 著 李永増訳1936「博物館與陳列館」『中国博物館協学会報』
23. Clarence S. Stein 著 趙儒珍訳1936「現代博物館之形式與功用」『中国博物館協学会報』
24. 李瑞年1935「歐美博物館及美術館陳列方法之演進」『中国博物館協学会報』
25. 荆三林1936「科学館之工作及組織問題」『中国博物館協学会報』
26. この論文は、英国人が論じたが、陳が訳文を参考文献にあげた。そして、ただ訳者のみを明記して

あるため、この論文は、中国語の参考文献に分類する。

27. 正確な書名は、『社会教育施設法』である。
28. 正確な書名は、『欧米博物館の施設』である。
29. 正確な書名は、A Naturalist in University Museum である。
30. 正確な書名は、Collected Papers on Museum Preparation and Installation である。
31. 正確な書名は、Libraries museums and art galleries year book 1935 である。
32. 正確な書名は、A report on the public museums of the British Isles である。
33. 正確な書名は、Museum Ideals of Purpose and Method である。
34. 作者の名前は、Gilman である。
35. 正確な書名は、The Museums Journal である。
36. 正確な書名は、The Conservation of Prin's: Drawing, and Manuscripts である。
37. この表の統計は、本論文で選んだ単行本の中で挙げる参考文献による。時間と国別の内容は、論者が記入したが、書誌情報が不明な文献は全て「不明」とした。
38. 梁吉生2005「中国博物館協会留下的學術遺產」『中国文物報』
39. 註4と同じ
40. 註7と同じ
41. 註6と同じ
42. 『中国博物館一覽』『博物館參考書』『古物之修復與保存』『地方博物館實施法』『博物館陳列器物圖說』は、刊行年が不明であったが、陳端志の1937年刊行の『博物館』の付説である「博物館に関する参考書」には、これらの単行本の刊行年は「去年」と明記しているところから、出版年は1936年と論者は推測するものである。